

第二編

被災者の生活体験 被害状況とその対応

平成7年4月17日未明、兵庫県南部地方に発生したM7.2大都市直下型地震は、死者6,308人、不明2人、負傷者48,177人、住宅の全半壊焼208,225棟（平成7.12.26消防庁調べ）ライフラインの破壊、道路交通網の寸断、情報途絶により、都市機能が完全に麻痺するといった甚大な被害をもたらした。

この大都市直下型地震は、日本においてまだ経験したことのない近代都市における地震被害の深刻さをまざまざとつきつけたものと言える。

この度の地震発生時刻が未明の5時46分であったことと、人身その他都市機能に与えた被害状況を考え合わせると、地震発生時刻によってもたらされる被害の状況は著しく変わったであろうと背筋の寒い思いがする。

- 困窮したライフライン
- ある税理士の記録(1)(2)
- 震災直後のライフラインの状況
- 被災直後の水、食料の状況
- 被災直後の衣料品
- 住居の被害状況と再建
- 被災後の医療
- 避難所の生活
- ボランティアの活動
- 被災直後の行政の対応
- 新しいまちづくりへの支援

悪夢の烈震

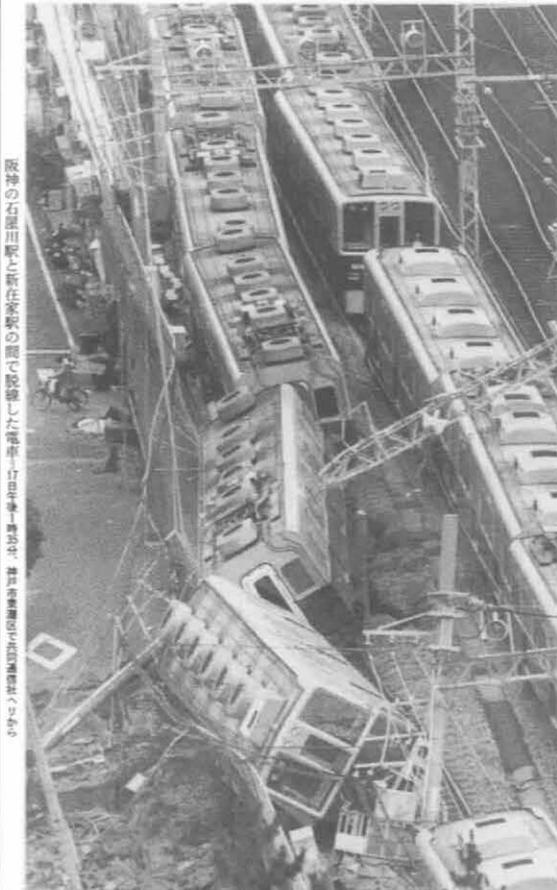
兵庫県南部地震



崩れた民家のそばで、ぼう然と座り込む女性(右端) 17日午前8時10分、高宮市



延焼が続く神戸市街。右下はポートタワー 17日午後、神戸市中央区で共同通信社ヘリから



阪神の石屋川駅と新在家駅の間で脱線した電車が17日午後1時30分、神戸市東灘区で共同通信社ヘリから



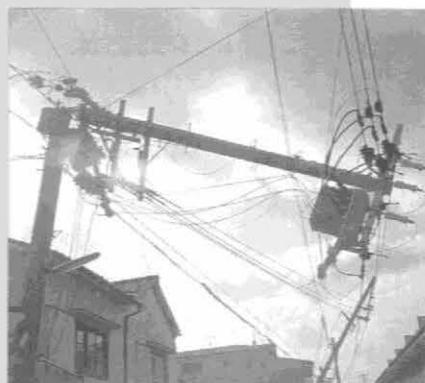
淡路島で地震のため倒壊した民家 17日午後、兵庫県淡路市を撮影



崩れ落ちて下の道路をふさいでいる阪神高速道路 17日午後1時30分、神戸市内

1

困窮したライフライン



未曾有の被害をもたらしたこのたびの震災について近畿税理士会において被災地13支部の会員より収集した阪神・淡路大震災に関するアンケート（回答者877名・第七編参照）によると、生活関連で困ったことの項目と件数は次表のとおりである。

表の示すとおり、生活関係では電気・電話の復旧は以外に早く進んでいる反面、ガス・水道の復旧は関係者の努力にもかかわらず1ヶ月以上断たれたままとなっている。

地震直後は、食料の確保、情報の収集あるいは住いの確保や家財の整理等身近な行動に明け暮れたが、一段落ち着いた後ではガス・水道関連を除けば、事務所への通勤あるいは顧問先への訪問のための交通に関する不便さを訴える会員が多い。

以前より地震発生時の対応の仕方はいろいろなことが教訓として伝えられていたが、激震に直面すると何もできないのが現実の姿である。

会員のアンケートにも「身体が硬直して何もできなかった」「あらゆる物が倒れ、壊れる音を聞きながら布団を頭からかぶって、ひたすら揺れの静まるのを待った」との回答があった。

生活関連のアンケート結果

項目	①地震後1週間位の間		②地震後1ヶ月位の間		③地震後6ヶ月位の間	
	件数	構成比	件数	構成比	件数	構成比
水	254	11.6	329	16.7	60	7.4
電気	262	11.9	69	3.5	8	1.0
ガス	109	5.0	340	17.2	121	15.0
電話	455	20.7	117	5.9	11	1.4
風呂	151	6.9	357	18.1	112	13.9
ガソリン	77	3.5	28	1.4	3	0.4
食料	258	11.8	76	3.8	14	1.7
衣料	52	2.4	26	1.3	9	1.1
住む所	58	2.7	43	2.2	50	6.2
情報	199	9.1	82	4.2	24	3.0
交通機関	97	4.4	269	13.6	308	38.2
防犯	54	2.5	65	3.3	33	4.1
医療	57	2.6	76	3.8	24	3.0
郵便	101	4.6	92	4.7	16	2.0
その他	9	0.3	6	0.3	13	1.6
計	2,193 ^件	100.0 [%]	1,975 ^件	100.0 [%]	806 ^件	100.0 [%]

神戸大学のアンケート調査によると、地震発生時に起きていた人の行動は次のとおりである。(複数記入あり)

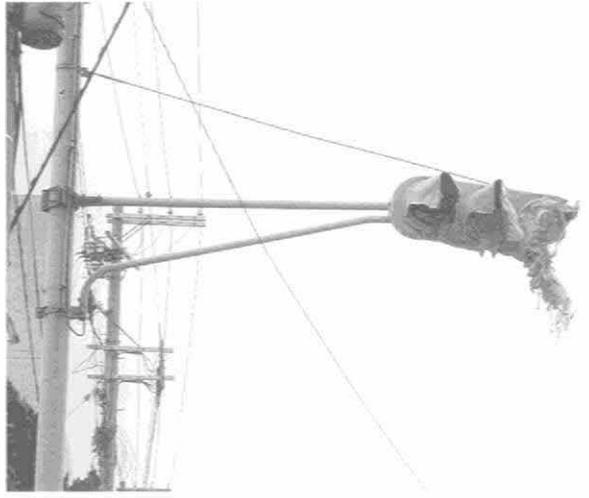
やはり何もできなかった人が多いが、注目

すべきは火気使用中の人の38.7%は火元の点検・始末をしていたが、30%強の人は何もできなかった。

項目	火気使用中119人	火気未使用198人
何もできなかった	30.3%	42.4%
自分の身を守るの精一杯	21.0	24.2
家族をかばった	12.4	15.2
布団をかぶった	14.3	17.2
机の下などに隠れた	4.2	4.0
家具などの転倒を防いだ	1.7	1.5
火元の点検・始末	38.7	5.6
外に飛び出した	10.9	8.6
その他	6.7	15.7

2

ある税理士の記録(1) (2)



ある税理士の記録 (1)

1月17日 5:46	地震発生。 グラグラッと揺れたかと思うと壁が傾き、たんすが布団の上に倒れてきた。もう少しで下敷きになるところだった。 家族の無事確かめ、取りあえず表に出してみる。 木造二階建ての我家は倒れてきた隣家に押し倒された格好で、平行四辺形に傾いているが、つぶれた隣家の中に閉じこめられた人の救出作業の方に気をとられ、自分の家どころではない。
8:00	やっと落ち着き、テレビで大震災の惨状を知る。 慌わててローソンに走ったが、どの棚もみな空っぽ。水・パンはもとより、少しでも口に入れられそうなものはほとんど売り切れ、懐中電灯、電池等も、もう無かった。 今日は税務調査立会の日だったことを思い出し、担当職員の家へ電話を入れる。このときはまだ電話が通じていた。お互いの無事確かめ、しばらく仕事どころではないことを確認しあって電話を切る。
10:00	余震の恐れがあり、今度大きく揺れると傾いた家が完全につぶれてしまう危険性が高いため、親元に避難することにする。 身の回りのものを持ち出そうとしたが、家具はすべて倒れ、割れたガラスや食器類、本等が散乱しその上に崩れた壁が乗りかかっている状態のため、殆ど何も持ち出せない。 車がつぶれなかつただけ幸いだった。
12:00	西宮市内の阪急電車北側にある自宅から、阪神電車南側にある親元まで、普段なら車で20~30分の所を2時間かかって到着。 途中、道路が陥没して通行不能となっていたり、倒壊した家屋や電柱が道をふさいでいたり、見慣れた建物が無くなっていたり、と周りの景色が一変していることに驚く。
13:30	ようやく空腹を覚え、パンとジュースの遅い朝食をとる。
16:00	芦屋市に住む妹の家族が避難してきた。 被害のひどかった地域で、自分の家と隣家の一軒を残して周りは全滅状態だという。 夕闇が近づくにつれ、心細くなったものらしい。
17:00	電気はついているが、水とガスが出ない。携帯用のガスコンロで当座をしのぐ。 飲料水はペットボトルの配給があり、助かる。 困ったのは水洗便所用の水である。近くに水の出ているところがあると聞き、皆でありったけの容器を抱えて水くみに行く。井戸水のあるところ

や、水道管が破裂して水が漏れているところには長い行列ができています。以後、重い水を抱えて4階まで階段を昇り降りすることが、皆の日課となった。

20:00 夕食。ここは幸い尼崎に近く、交通事情が比較的良いせい、近くのコンビニで食料を調達できた。むろんファーストフードのようなものばかりであるが、誰も文句を言うものはいない。

互いの無事を確認し、屋根のあるところでこうして食事ができることを感謝するばかりである。

23:00 一日中、時間のある限りテレビに見入っていた。

特に、神戸市須磨・長田区の大震災の画面が映し出されると、もうその前から離れることができない。

友人・知人、顧問先の安否が気にかかる。誰もいつまでも眠ろうとしなかった。

1月18日 8:00 一夜明けると、少し気持ちが落ち着いているのが分かる。やはり昨日はかなり興奮状態にあったようだ。事務所職員と連絡を取り始める。

11:00 食料の買い出しに出かける。水くみ用のポリバケツ、ガスコンロ用のボンベ、使い捨てにできる紙食器等も買い求めようとするが、なかなか手に入らない。

結局これらの必需品は、遠方の友人が届けてくれた。

3:00 ペットボトルの配給があると聞いて出かける。一人2本ずつとか。長い列の後ろに並んで順番を待つ。

19:00 顧問先と連絡を取りたいが、手元に住所録がないのでどうしようもない。被害の少なかった職員に何とか連絡を取る方法を講じるよう依頼。

21:00 やはりテレビに釘付けになって一晩を過ごす。

1月19日 8:00 事務所が心配なので神戸まで車で出かける。神戸市内の交通事情を考えて、車のトランクに自転車を積み込む。これは業務再開後、非常に役に立った。

12:00 事務所到着。比較的空いていると聞いた山越えの道を利用したのだが、それでも4時間を要した。

ビルは無事に建っている。ホッとしたものの、大きく段差のできた玄関口をまたぎ、無惨なひび割れの入った壁を見ながら階段を昇っていくと、なにやら不吉な予感がする。

部屋の中は予想通り、手の付けられない有様だった。とても一人では片付けられないと諦め、住所録だけを持って、早々に部屋を出る。

17:00 ぐったり疲れて家に帰る。

20:00	<p>しばらく入浴は諦めていたが、近所の公衆浴場が営業していると聞き、喜んで出かける。</p> <p>長蛇の列である。半時間ごとの総入れ替え制とかで2時間待ったが、浴槽に浸かったときは生き返った思いがした。</p> <p>職員の一人から連絡があり、比較的被害の少なかった地域に住む男性職員5人が集まり、顧問先に連絡を取り始めたとのこと。</p> <p>事務所職員全員の無事を確認出来たので23日に事務所集合と決める。</p>
1月20日 9:00	<p>自宅の方に戻ってみる。震災当日よりも道の混み方がひどい。</p> <p>漏電の心配があるので電気のブレーカーをおとし、ガスの元栓を確認し、玄関に連絡先の張り紙をした。</p> <p>子供の学校の教科書類と当面の着替えだけは持ち出したが、それ以上モノに執着していると気が滅入るばかりなので、さっさと引き上げることにする。</p>
17:00	<p>水くみと食料の買い出し、行列で一日が終わった。</p> <p>にわかに大家族となったため、重労働である。我が家と妹一家の子供たちを、京都の親戚の家に預けることになった。</p>
19:00	<p>いやがる子供たちに、水が出るまでの辛抱だからと因果を含める。</p> <p>夕食。大人たちはそろそろ仕事のことが心配になってきており、話題になるのは今後の見通しはどうなるかということばかりである。</p>
1月21日 9:00	<p>子供たちを親戚の家まで送っていく。帰りに食料その他の必需品を買い込んできた。</p> <p>少し地域を離れただけで、いつもと変わらない日常があることに戸惑いを覚える。</p> <p>交通マヒがひどいため、夜遅く帰宅。</p>
1月23日 10:00	<p>名古屋に避難した者、四国に帰省した者を除いて全員出勤。1時間歩いてきた者、代替バスを乗り継ぎ、へとへとになって出勤した者等さまざまである。</p>
17:00	<p>事務所内の片付けで一日が終わる。</p> <p>帰宅。暗くなる前に帰らないと危ない。</p> <p>三宮の代替バス乗り場にも、やはり行列ができています。誰もが疲れた表情で黙々と並び、黙々と歩く。</p> <p>家まで2時間半かかった。</p>
1月24日 15:00	<p>事務所の片付けをしたあと、職員と3人で尼崎まで行く。原付自転車を買</p>

い求めるためである。この交通事情では、徒歩だと身動きするだけで疲れてしまい、仕事にならない。

どこも品切れで、手に入れるのに苦労する。

1月25日 7:30

バイクで通勤。初めて乗って、早速弟の車にぶつけ、バンパーを壊す。道が悪く、でこぼこ道を迂回しながら神戸まで行く。車とバイクと人でごったがえし、ほとんど命がけである。

17:00

一日中事務所内の片付けをする。上階から水が漏れ、書類が水浸しである。乾かしても使いものにならず、捨てなければならないものも多かった。

1月29日 14:00

学校が始まるので、待ちかねたように子供たちが帰ってきた。妹家族も自分の家に帰る。私たちは帰るところがないので、このまま親元の厄介になるしかない。

2月14日 11:00

自宅隣家の人から連絡があり、久しぶりに自宅に出向く。塀が壊れているため境界の確認と、いつ解体するかという相談であった。余震でいつ崩れるか分からないため危険でもあり、早急に撤去する必要があるが、いざとなると感傷的な気分になる。

3月5日 10:00

倒壊家屋については、公費負担で解体・撤去されると聞き、西宮市役所に申し込みに行く。ここでもたくさん行列ができています。

3月17日 22:00

仕事を終えた後、バイクで帰宅途中事故に遭う。前に飛び出してきた乗用車を避けようとして、横転したらしい。気が付いたら、病院のベッドの上にあった。肋骨3本と左肩の鎖骨が折れているとかで、痛くて身動きできない。

3月18日 10:00

一晩中殆んど眠れず。
たまたま運び込まれた病院が、事務所の近くだったので助かった。動けないことと痛いことさえ我慢すれば思考力に影響はなく、モノが言え、右手も動くことが不幸中の幸いと言うべきか。
結局一ヶ月半入院する羽目となり、職員と家族には多大の迷惑をかけた。

5月2日 11:00

退院。
帰宅してみると、生活環境はほぼ震災前の状態に戻りつつあり、水・ガス・電話はもとより、商店の品揃えも大分豊富になってきている。

ある税理士の記録 (2)

1月17日 5:46

時間がはっきり判明していなかったが長田区のマンションは気のせい
か窓の外が明るいなと思った瞬間ドーンという縦て揺れの後、地鳴りがし
物凄く揺れた。この時は地震だとは分からなかった。

寝室に1才の子供が居たので物の落下に気を付けるのが精一杯の行動だ
った。恐怖と揺れで一步も動くことができない。

たんす、食器棚が倒れガラスの割れる音がすごくした。

第一波の揺れがおさまり別の部屋で寝ている子供の無事を確認できほっ
としたのも束の間、第二波の揺れが来たのが分った。懐中電気の明かりを
頼りに部屋を見渡すと家中のたんす、本棚、食器棚のすべてが倒れ床中に
ガラスの破片が散乱していた。この中を素足で歩いたのかと思うとぞっと
した。

6:00

子供たちに靴下を履かせ、パジャマの上から手近にある物を着せここから
早く出なくてはいけないと思った。というのもマンションで火事が発生す
るとパニックになると思ったからだ。

6:10

玄関の扉を開けると明るいのでビックリした。マンションは廊下の蛍光灯
が非常時でも消えないことに初めて気が付いた。もっと早く開けるのだっ
た。知人宅の扉をノックして無事を確認しながら階下へ降りたが、余震が
続き外がまだ暗かったので出るのは危険と判断し、3階の友人の家で明る
くなるのを待つ。

6:30

南と西方向で、薄明かりの中に火事の炎、煙が見えた。幸いこの付近には
火事は起きていない。しかし、家屋のほとんどがつぶれている。凄く大き
な地震だったことに改めて驚いてしまった。この被害が一体どの地域にま
で及んだのかカーラジオのスイッチを入れたが、この時はまだ「神戸で大
きな地震」とだけ報道されていた。

7:00

火事、盗難を心配し7階から印鑑、通帳、鍵類を袋に詰め持ち出す。
蓮池小学校体育館に避難、すでに20人位が集まっている。校門の鍵を壊し
て構内に入った様である。見るとパジャマに毛布を巻いただけの人や、と
りあえず衣類を身につけたという人が多くびっくりした。
水が出ない/1才の子供はまだオシメが取れておらずこの後どうなるの
か不安であった。

8:00

体育館はすでに満杯状態であったが、家族の居る場所も何とか確保でき
た。余震が来る度にギシギシと音がして、どこからともなく大きなどよめ
きが起こった。

8:10

須磨区の両親の安否が気になり自転車で家に向かった。
長田区から須磨区板宿商店街を通ると、家が傾き、土塀が倒れ、崖崩れ、

	地割れ、陥没が発生していた。 とんでもない大きな地震である。これはただ事でない…と胸が苦しくなるのを覚えた。
8:30	20分も走るとどうも様子がおかしい。地震が全くなかったと思われるほどいつもと変わらない街の風景をとどめている。不謹慎ながらこんな不公平なことがあってよいものかと思った。 これなら自動車も通れると判断、今来た道を引き返した。
8:50	車で再度出発。 地割れ、陥没等あり信号も点灯していなかったが、車は交差点で一旦停止を行ないクラクションも鳴らさずマナーがよく守られていると思った。 すぐに実家に着き両親の無事を確認できた。
9:10	長田区の惨状を両親に話し、避難所にいる子供たちを実家へ避難させるため、車を走らせたが、途中で緊急車両を通すために道が封鎖されていた。回り道をすると車があふれて進まない。
11:30	須磨区太田町で火事が発生し道が封鎖されていたが、家族を迎えるためにはこの道しかないことを話すと通してくれた。
11:40	小学校は避難者であふれ返り、体育館以外の教室もすべて開放されていた。
13:00	実家へ避難したが、ガスと水道は使えない。
14:00	家族が急に増え、水、食料、燃料などについてどうするか話し合った。 出来るだけ節約し不足した時は郊外への買い出しとする。 子供たちと今日初めておにぎりを口にした。
15:25	近所の人たちがガスが出ているというので元栓を調べると自動閉鎖されていた。 ガスは使用できる、しかし水は何時出るのだろうか。 水洗トイレは多量に水を使うので池の水を使用する。
21:00	余震の度に子供が怯えている。大人も同じである。 風呂もなく冷えた身体を丸くして就寝。
1月18日	いつも見慣れている街が火に包まれているテレビの映像を見て胸が痛んだ。自宅は大事に至っていないので安心した。 情報は専らテレビに頼っていた。地震の被害は南北には比較的少なく、東西に広範囲であることが分った。
1月19日 10:00	水と食料の買い出しのため三木市方面に車を走らせたが、ガソリンを入れたくてもガソリンスタンドの多くが閉まっていた。 道は買い出しの車があふれ、売り場はどこも一杯で遠くまで行かねばならなかった。

		食糧は買えたが、ポリバケツはどの店も売り切れで買えなかった。
1月20日	11:00	自宅マンションの片付けに帰ったが、停電のため掃除機を使えない。 倒れた家具もそのままに放置するしかなかった。
	12:00	避難所でパン、ペットボトルの配給を受ける、ここでは弁当は避難者として登録しないと受けられない。不公平であると思う。
	18:00	社町の友人がカセットコンロとポリバケツを買って救援に来てくれたが、その近所にはもう無く西脇市まで行ったそうで、値段も高くなっていたとのことである。
1月21日	10:30	自宅マンションに電気が通じた。倒れたたんす、本棚、食器棚などを起こすが余震に備え壁の方に少し傾斜を持たせる。ガラスが床一面に散乱しているので軍手を着用し、スニーカーを履いたままガラスや陶器の破片を出来るだけ細かく砕いて袋に詰める。紙、ビニールの袋は直ぐ破れてしまうので麻袋に詰める。大きいままだと角が袋を突き破り怪我をする。 掃除機を使用するが小さなガラスの破片は吸い込まない。
	16:00	手持ちのゴミ袋10枚は直ぐになくなったのでゴミ袋をベランダに出して引き上げる。
1月22日		朝から夕方まで片付け、ガラスの破片がまだ残っていて危険、粘着式ローラー掃除器を使用するとよく取れたが念のためビニールシートを敷き詰めた。
	18:00	実家から家族がマンションに帰る。井戸水を開放してくれている近所へ皆で汲みに行く。エレベーターが動いていないので両手に水を持っての登りは本当に大変であった。 夜半、余震に震え上がった。
1月23日	10:00	ベランダがゴミ袋で一杯になったので7階から降ろす。階段での搬出はきついのので数日に分けて降した。
1月24日		ゴミ置き場が満杯になり、搬出を控えるように回覧が出る。
1月25日	20:00	知人の仮通夜が近所の高校体育館で行われた。 知人宅は木造2階建て、1階部分で就寝中に夫婦一緒に梁の下敷となったのだ。どこの火葬場も一杯のため、三田市まで行かねばならない。
1月28日	9:00	小学校が避難者で授業ができず、3学期が自宅待機となり、迷った末に長女を知人宅に預け西区の小学校に転校させる。
2月4日		マンションの地下で下水管が折れている。このまま使用すると1階が汚水であふれてしまう恐れがあるので使用禁止となる。

2月18日 13:00	全壊した知人宅の家財の搬出を手伝う。1階が無くなっているので2階の畳を剥がし、おおよその見当で上から掘り進むのである。
2月22日	鹿島建設が自宅マンションの内部調査を行う。
2月24日	下水管の補修が終わり水が流せるようになる。
2月27日	マンションの傍に仮設水道が引かれた。エレベーターはまだ動かない。
2月28日	新小学1年生に神戸市からランドセルが贈られた。
3月10日	水がようやく出るようになった。 魚水槽用ヒーターで12時間かけ、湯を沸かし風呂に入る。湯が少なく直ぐに冷えてしまうが久しぶりの我が家の風呂である。
3月17日 17:30	大阪から3時間かけて移動シャワー車がきた。 入浴時間は13:00~18:50となっていた。
3月22日 13:00	長田区役所へ、り災証明を取りに行く。その判定は半壊であった。その場で義援金の申し込みを済ませる。
3月29日	待望のガスが使えるようになった。
5月8日	小学校が8:30始まり平常の時間割に戻る。
5月17日	自宅マンションの補修工事が始まる、足場を組みネットを被せるので昼間でも暗く風も入らない。
6月19日	市の災害援助資金借用を申し込む。
10月14日	震度4の余震。
11月30日	やっとマンションの補修工事が終わる。 風雨にも安心して生活ができるようになりホッとす。

3

震災直後のライフラインの状況



1 交通

鉄道関係では、東海道・山陽新幹線は始発から運転をストップ。JR西日本をはじめ各私鉄が、一斉に運転を取りやめた。

JR、阪急、阪神、神戸、山陽、神戸高速、神戸新交通、神戸市営地下鉄等の鉄道が、高架橋の倒壊、車両の損傷、駅舎の損壊など多大な被害を受け、交通大動脈の機能が停止し、各地で大混乱が起きている。

高速道路関係では、阪神高速の高架橋が倒壊・落橋し通行不能、名神・中国・近畿などの高速道路、第二神明道路・姫路バイパスの一般有料道路が被災し、一部通行止めとなった。

一般道路は被災者のマイカーやタクシー、救援車両、業務用車両等々でごったがえし、至る所に地割れ現象がみられ、倒壊家屋が道をふさぎ、道路交通は混乱を極めた。

壊滅的な被害を受けた鉄道の代替として、1月23日各社は西宮市より神戸市の玄関口である三宮駅付近までバスの運行を開始した。

起点は、JRは甲子園口より、阪急は西宮北口より、阪神は甲子園より、それぞれ三宮を目指して出発したが、国道43号線は神戸市東灘区における阪神高速道路の倒壊で通行できず、西宮市・芦屋市・神戸市東灘区の通行可能道路は国道2号線一本のみであったため、大渋滞の中をノロノロと走った。乗車に長時間の行列、そしてノロノロ走行と僅か20km足らずの道程に1日近くかかる始末であった。

その後43号線（東灘区御影～灘区岩屋間）にバス専用レーンを設け、代替バスを優先通行させたので少しずつ混乱は緩和されていった。

この代替バスは、6月26日阪神電鉄の全線

- 1 交通
- 2 通信
- 3 水道
- 4 電気
- 5 ガス

公共の交通機関は壊滅的であり、道路は避難する人と救援の人・車等で全く機能を成しておらず、移動はアンケートによると次表のようになっている。

渋滞を覚悟でマイカーを頼った	17.3%
自転車・バイクに頼った	21.2%
代替バスを利用した	27.3%
(代替バスの運行は1月23日より)	
徒歩	34.2%

代替バスの運行前の移動は、もっぱら自分の足以外に頼るものはなかった。

寸断され、或は大渋滞で麻痺している陸路に代わって大阪港から神戸で唯一着岸できるハーバーランドへの海上輸送が始まったのは1月20日である。

救援に向かう人、出勤する人たちで待合室に入れなほど乗客が殺到し乗船できず引き返す人もあった。

震災によりずたずたになった阪神間の主要鉄道の復旧状況は、次表のとおりである。

悪夢の街に復興の光

市民の脱出加速
 臨時船 新幹線つながらる

兵庫県南部地震発生から約一週間、被災地は依然として壊滅的な被害に悩まされている。市民の脱出が加速し、臨時船や新幹線が被災地とつながるようになった。



船で脱出 被災地とつながる臨時船

警鐘、届かず
 自宅崩壊 夫婦でけが

兵庫県南部地震発生から約一週間、被災地は依然として壊滅的な被害に悩まされている。自宅が崩壊し、夫婦がけがを負ったという報告が相次いでいる。

病棟の一部に亀裂
 神戸 患者ら60人が避難

神戸市内の病院で、病棟の一部に亀裂が生じた。約60名の患者が避難された。被災地の医療体制は大きな打撃を受けている。

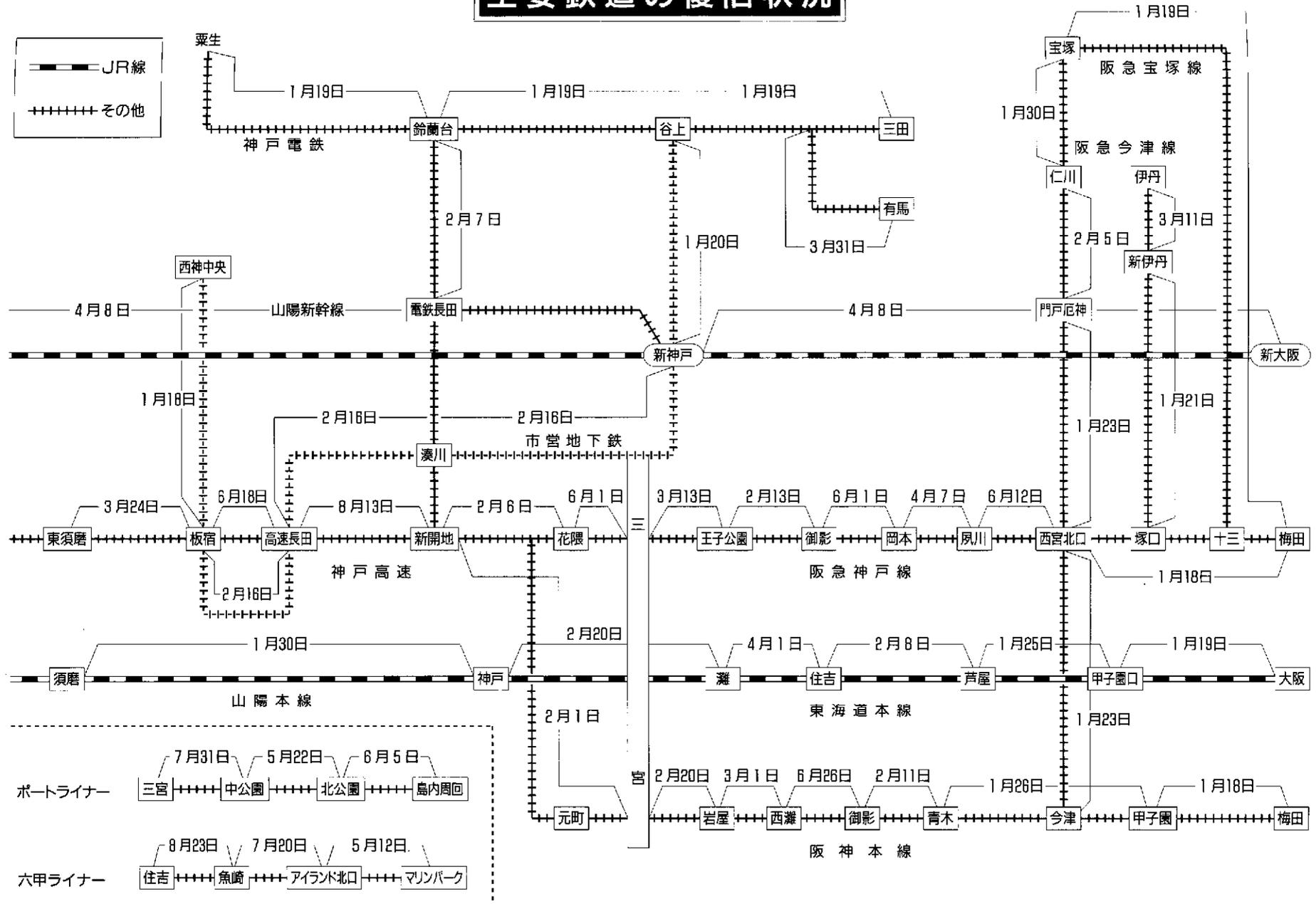


崩壊の危険 神戸市立舎

神戸市立舎の崩壊の危険が指摘されている。被災地の教育施設は大きな被害を受けている。復旧作業は急がれている。

被災地の復興に向けて、政府や民間企業が力を合わせて支援している。被災者の生活再建が最優先課題とされている。

主要鉄道の復旧状況



発生直後は、被災地だけでなく、外部からの電話が同一地域に殺到したことも、通話不通となった一因と思われる。

安否確認手段としてやはり、電話が最も利用された。

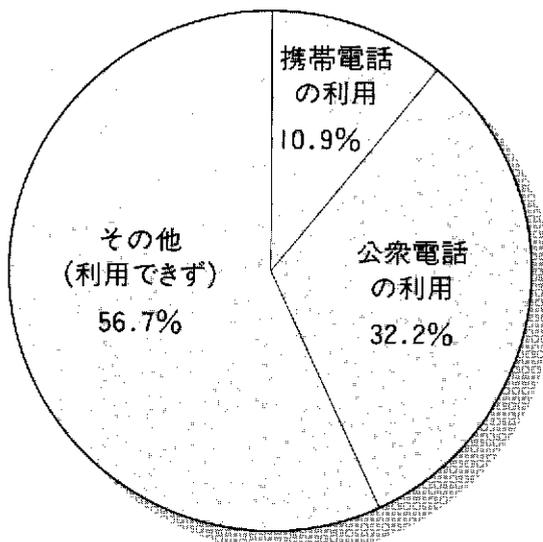
断線等で電話回線がパンク状態となり、近畿2府4県ではかかりにくい状況が続く。

家庭用電話が通じにくいため、公衆電話の前に順番待ちの列ができる。

威力を発揮したのが携帯電話である。NTTも各力所に臨時電話を設置する等、通信の確保に努めたため、当初の混乱はほぼ1ヶ月で收拾されたようである。

郵便も郵便局舎の破損、局員の被災、受信者の所在不明等の理由により、正常な配達ができず、2月末頃まで全く配達されない地域もあった。

アンケートでも通信に関する回答は



であり、半分以上の方が利用できないままの生活を余儀なくされた。

体験談

自動車は平常時には便利であるが、今回のような震災時には邪魔者扱いがあるので、むしろ自転車・オートバイなどの二輪車があれば役立った。

~~~~~

車で20分のところを5時間かけて行った苦い経験がある。

~~~~~

震災直後1週間位は、人命救出を最優先するため、被災地以外から車を持ち入れるべきでない。

~~~~~

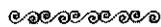
大阪からの通勤時間が片道4~5時間要したこと。特に代替バス待時間が寒い中で1時間30分~2時間要したこと。代替バス待ちでは割り込みする人も全然なく整然と行列しており、寒さに負けず通勤している人々に私は強い感動を覚えました。

~~~~~

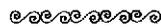
1月19日灘区内の事務所の被害状況が気になり、明石を出発して徒歩にて11時間歩いて到着しましたが、類焼によって事務所は跡形もなく無残な姿をさらけ出しているのを見て絶句し、茫然自失の態でした。

無理をして歩行長時間が祟り、左膝を痛めこれ以上の歩きも困難となり当夜は近所の屋外避難所に合流させて貰い焚火をしながら一睡も出来ず夜を明かしましたが、疲労と睡眠不足を抱えて翌朝近所の屋内避難所の中学校の教

室に移って21日22日と過ごし、23日午後息子の自転車に相乗りして自宅に戻った次第です。



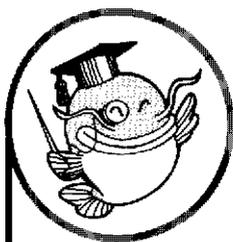
郵便局も庁舎の被害、局員の被災等のため2月末まで郵便の配達がなく税理士会等の情報が全く分からなかった。



1月25日から始まった交通規制強化により、ポートアイランドから出る唯一の神戸大橋は国道2号線の渋滞に阻まれ「ボトルネック現象」で全く機能を失い、震災前は数分で通れた道が3時間もかかるようになった。



救援活動や復興物資を運ぶ車に対して交付される国道2号線・43号線の通行許可証の発行も30万枚に達し、そのうえコピー・自家製の手書き証票も氾濫し、すき間のないほど道路は車の行列となった。



防災の心得

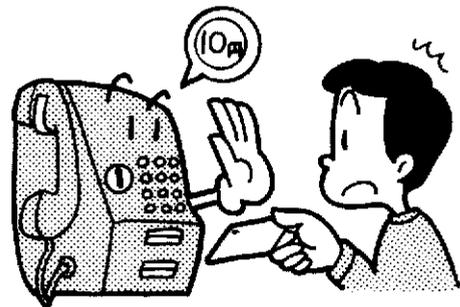
交通

- ① 交通手段として徒歩に頼らざるを得ない場合もあるので、日頃からジョギング等適度な運動の心掛けを。
- ② 自家用車には、常にガソリンを十分に入れておくこと。

(災害後)

- ① 秩序を守る。
信号が使えなくてもお互いに譲り合い事故がなかった。
クラクションの音が聞こえなかった。
- ② 地震後すぐ車で逃げない……我が家の近所では地震で川沿いの道が崩壊して川に落ちた。(道が無い状態)しかし、真っ暗で見えないので知らずに車がつっこみそうになった。逃げる途中の人が静止して助かったが、……思わぬところが崩れている。
- ③ 交通大渋滞のため、移動には、自転車、バイクが便利。
- ④ 交通機関及び道路の復旧情報の確認。

通信



- ① 10円玉の用意。停電中は公衆電話で百円玉、及びテレフォンカードは使えない。
- ② ラジオ・懐中電灯の常備……予備の電池の保存
ラジオは唯一の情報源となった。
- ③ 携帯電話の所持。(予備電池を十分に備えておくこと)
- ④ パソコン通信の活用の意見もある。但し電話回線の遮断、電源のない場合は使用できない。
- ⑤ 携帯テレビ。

4 電 気

地震発生直後、一部の地域を除いて阪神間のほぼ全域で停電。火力発電所、変電所、送配電線、通信設備が損傷、基礎の沈下、倒壊、破損などの被害を受けた。

ただ切り替え送電や応急送電などにより、停電の復旧は比較的早く、1週間後にはほぼ全域にわたって、電力の供給が可能となっている。しかし、ビルやマンションにおいては外線までの復旧が終ってもビル内部の配線の破損修理、点検等に工事業者の手不足もあって手間どり、使用までには相当の日数を要した。ガスについても同様の状況であった。

関西電力の調べでは、3府県で最大約2,600,000軒の停電。1月23日応急送電完了。

5 ガ ス

都市ガスの貯蔵施設や高圧幹線についての被害はなかったが、LPGタンクの損傷、導管亀裂によるガス漏れが発生、付近で火災が発生したことや、2次災害の恐れがあること等から、神戸市、西宮市など被害の大きかった地域で供給の停止が行われた。

大阪ガスの調べでは、神戸・芦屋・西宮の各市を中心に、最大857,400戸の供給停止。4月11日復旧と発表されている。但し、水道同様一部の地域及び建物では、電気ガスとも相当復旧が遅延した。

体験談

他府県からのガス・水道の復旧応援の姿の力強さ。

救援の方々は当初宿泊する場所もなく、車の中で仮眠しながら被災者と同じく着のみ着のままで復旧に励まれた。ありがとうございました。

~~~~~

電話線が通じても、いわゆるビジネスホン、ホームテレホン（親子電話等電気を要する電話機）は電気が不通の場合使用できないので不便である。

「停電切替え電話機」があるとのことであるが、あまり知られていないのではないか。

~~~~~

石油ストーブも電源を要するものは使用不能。電源を要しない旧式のものがある場合便利である。

~~~~~

水・ガスとも無く入浴に遠くの親戚、遠方の公衆浴場、ホテル、ゴルフ場等を利用された方は数知れず。

~~~~~

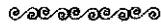
自衛隊が設置してくれたテント風呂に入れて助かった。

~~~~~

港に係留している船舶の風呂を利用した。

~~~~~

電気が比較的早く通じたので、約20年前のラーメンを暖める電気コンロが唯一の煮炊きの手段であった。



大部分の人がカセットコンロを入手して、都市ガスの代わりに利用した。



電気が通じて後、電磁鍋による調理が主となった。



未明のパニック

1月18日未明東灘区御影浜町のLPG20,000トン入りタンクの一部で地震による亀裂のためガス漏れが発生した。ガスが付近に充満し爆発の危険があるため、東灘区の西半分（半径約2km）の住民に国道2号線以北への避難勧告が出された。

その数70,000人とも80,000人とも言われている。勿論この範囲内には、既に避難所となっている学校等があったが例外なく退去した。このため既に満杯状態の他の避難所は、押し寄せる人の波で大混乱となった。行く所もなく校庭や路上で一日を過ごした人も大ぜいであった。

孤島と化した六甲アイランドの住民は、少しでも遠くへと島の南東部へ避難した。

前日来通信は混乱しており、この伝達もラジオを聞いた人達が伝えたため正確な情報は全くなく、警察・消防への確認の電話は通じない。また、テレビの情報も2転3転したようである。

ラジオも午前6時28分「タンクから4km以上遠くへ」と報じたため一層の混乱が生じた。後刻、訂正報道をしたようであるが。

当時付近一帯はほとんど停電中でありテレビを見た人はあったか疑問に思

う。

午後6時半避難勧告は解除されたが、後に新聞等によるとガスを隣のタンクに移し替えを開始した頃のものであり、いわゆる見切り発車の状態の避難解除であった。ガスの移送は1月22日午後3時まで続いた。

幸いガスタンクは爆発することなく終わったが、我が身の危険を顧みずガスを他のタンクに移し替える作業に従事された消防・会社の方々には頭の下がる思いである。

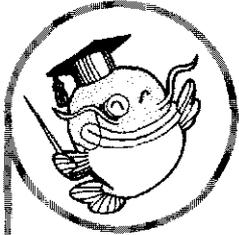
ちなみに、1984年にメキシコで起こった爆発事故では、ファイアボール(火の玉)は地上500mに達し、半径500m以内の家屋は全壊、1km以内でふく射熱による死者が出たとのことである。



災害時に自宅を留守にする場合は、必ず電気のブレーカーの遮断、ガス・水道の外部元栓を止めるべきである。今回の震災でもガス漏れ、あるいは通電に伴うものではないかと想定される火災が随所に発生した。

わが町では、17日夜火災・盗難防止のため有志が各戸を巡回し、ガス・電気のチェックを実施したところ、完全に元栓を止めていた家庭は一部にも満たず、ほとんどの人が元栓を締めずに避難していた。

閉栓済みと玄関・メーター部分等に表示しておくのが、開通時に有効である。また、近隣の人に安心感を与える。



防災の心得

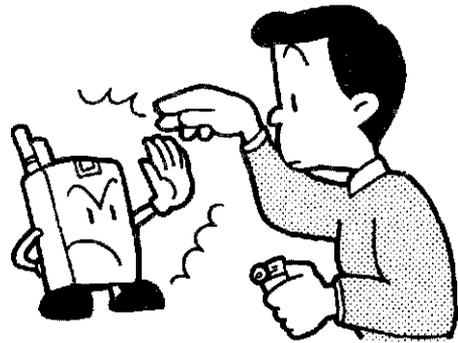
暖房

- ① ストープは旧式の物が使える。電源を要するファン式は停電の時使えない。
避難所の多くは火災防止のためストーブが使用禁止となっていた。暖房は使わずにカイロが便利である。通電時には、電気関係者による漏電チェックを受けること。



ガス

- ① 室内・屋外のガスの元栓を閉める。
- ② ガス管が破損しているのがガス漏れに注意する。
スイッチ類に手を触れない。
- ③ 喫煙の厳禁。



1 (神戸新聞2月18日(水)第1版) 神戸新聞 第34924号 1995年(平成7年)1月18日 水曜日 (白紙)

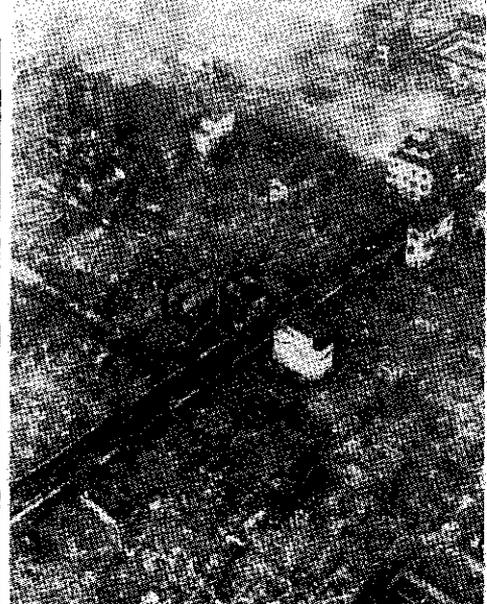
死者、不明2800人超す



夕刊
発行部数 100万平方
100万平方
100万平方

兵庫県南部地震救助活動難航

ガス漏れ 東灘の8万人避難



広い範囲で被害、焼け跡となった神戸市長田区東灘218日午後7時25分

40万世帯で停電続く

神戸など 避難所 12万人が眠れぬ夜

鉄道一部で復旧

神戸新聞 2月18日(水)第1版

兵庫県南部地震発生から約2週間、被災者の救助活動は依然として難航を続けている。被災者の救助活動は依然として難航を続けている。被災者の救助活動は依然として難航を続けている。

神戸新聞 2月18日(水)第1版

兵庫県南部地震発生から約2週間、被災者の救助活動は依然として難航を続けている。被災者の救助活動は依然として難航を続けている。被災者の救助活動は依然として難航を続けている。

4

被災直後の水、食料の状況



1 被災直後の水

水道管の破損によりすぐに断水となったので、水の確保がすべてに優先することとなった。震災直後、スーパー・商店はパニック状態となり、水や食料品、ポリバケツ等はすべて売り切れた。

飲料水は近辺の井戸水の利用、家庭内の残水、水道の漏水等でしのいだが2～3日後から窮乏状態は深刻さを増し飲料水、食料の確保にやっきとなった。

地域によってはこの頃から各自治体、自衛隊の救援活動がはじまり被災者が列をなしたが、救援開始の遅れた地域もあり割り当ての不公平や不足が出た。

また水は飲み水ばかりではなく、多量の生活用水を必要とする。洗顔、洗濯、水洗便所、風呂に使用する水については、断水状態が長引くにつれ、毎日の水の運搬が重労働となった。特にエレベーターが動かないなかでの高層住宅の居住者には大変な負担である。

入浴に関しては、水やガスの供給が開始されるまで自宅の風呂は使用できなかったため、営業している近辺の公衆浴場は入浴を待つ人の長い列ができ、また遠方の浴場まで出向く人もいた。1週間に1度の入浴が難しかった人も多く、入浴車の巡回サービスが一部の地域で行われた。

水のない水洗便所がいかにも不都合なものであるかも、被災者は痛感したはずである。

1 被災直後の水

2 被災直後の食料

体験談

大混乱の1月17日避難所で乳児のミルク用の水がなく困窮した。

~~~~~

コップ1杯の水で歯を磨き、残った水で顔を洗った。

~~~~~

近くの公園で水道が出ているのを知り、水運びに明け暮れた。

~~~~~

川の流水を汲んできて、洗濯やトイレ用に使用した。

~~~~~

近くで井戸を持っている方が、開放してくださり助かった。

~~~~~

親戚・友人等が遠くから水・食料を運んでくれ涙が出た。

~~~~~

自衛隊の給水車は非常に親切でありがたかった。

~~~~~

寒い中、自分は水でビショビショに濡れながら被災者に給水をして下さった他市の水道関係者に感謝。

~~~~~

試験通水後、道路のあちこちで吹き出している水を汲んできた。

~~~~~

風呂の残り湯をトイレ用に使用した。

~~~~~

事務所のトイレ使用不能のため、女子職員の出勤に支障を来した。

~~~~~

食器は洗えぬので、ラップを引いて使用した。箸は割箸を使用した。

~~~~~

自宅から家財を出すのに埃まみれでしたが、水がでないため顔も手足も洗えず、自衛隊が来るまで風呂に入れず、同じ服同じ下着を1月末頃まで着ていました。

~~~~~

1月26日10日間も風呂に入っていないため東条町の「とどろき荘」に行く。自宅を10時頃出発、タクシーで新神戸オリエンタルホテルへ。途中道路の混雑のため約1時間20分程度かかった。同ホテル内のオーパで昼食を取る。カレーとコーヒーであったが、市内で外食をしたのは震災後初めてであった。特にコーヒーは10日ぶりでした。震災を忘れることができた。12時過ぎ北神急行新神戸駅を出発同谷上駅へ、神戸電鉄で鈴蘭台駅を経て三木駅に着く。三木駅からは妻の弟の車でとどろき荘まで送ってもらった。午後4時頃10日ぶりに風呂に入り生き返ったような心地がした。同所で一泊、すべての費用は一人当たり9,400円であった。

1月から2月 とどろき荘 5回  
3月 尼湯ハウス 7回

~~~~~

3連休を終えて7年度の仕事も今日から本格的に、と思っていた「H7.1.17AM5:46」。

驚愕の夜明け……停電/携帯ラジオの地震報道/十数本の黒煙と紅蓮の炎/狂ったように鳴る消防車のサイレン……足の踏み場もない、靴履きで家

の中を……家は残った。息子が会社の倉庫を調べ帰宅し、街中の惨状を伝える。

事務所が気になる。三田から走ってきた職員共々行ってみる。途中の被害状況から我事務所の倒壊を覚悟していたが、何とか残っていた。勿論部屋の中は荒れ放題、2時間かけて徒歩で出勤してきた職員と三人で僅かに入口付近を片付け、余震を恐れ帰宅する。

◎ 18日木曾、開田村より安否を問う電話が入り、無事を告げ元気づけられる。

続いて20日「やっと掛った」と電話が繋がる。「御岳の地震を体験した我々として黙って見てもらえない、その時の状況から病院の水不足が酷かった。有志で水を運びたいが受け入れる病院を知っているか？」とのこと。

大変な時間がかかるからと深謝したが、とにかく今から瓶詰をし、明朝出発すること。直ちに近所の救急病院へ受け入れの確認に走る。

「患者は震災以来、4日間飲み物は烏龍茶だけ。飲料水がくれば食事の時にお茶が出せる」との返事。

道路事情を考慮し「何時になるかわからないが……」と言っておく。

木曾からはMさん他2人が来ること。

◎ 21日PM 3:00「今、藤井寺です」と携帯電話。以後番号を聞き取って、こちらから連絡することとする。

PM 5:00尼崎、そこからはほとんど停止状態とのこと。

◎ 22日AM 0:30芦屋の手前。AM

1:30宮地病院前……「すぐ右折して……」と山手幹線を指示し、K病院へ、途中人に出会わない、病院前に“母が家の下敷きになり入院中”という40才位の男性が立っていて、伯父さんの到着を待っているとのこと。30分程待つがトラックがこない（石屋川からの旧市電筋は空いていた）。家に電話してみると「田中町という所にいる」と連絡があった由。……

来た白いトラックにMさん、FさんとNさん、とにかく“水”を降ろそう。1.5tの水はボール箱150個、4人の荷降ろしが知らぬ間に、本当に知らぬ間に7人になっている。先程の男性と待合室で付き添い、仮眠していた二人の若者が加わっていた。お互いに言葉を交わすこともなく、黙々と荷降ろしをし、終わると元の待合室や病院前に戻って行った3人の男。

今後街で出会っても顔も覚えていないだろう。震災の救急病院の私暁のチームワークだった。

病院で名を告げることもなく、我が家でコーヒーを飲み、束の間の休息の後Mさん達は「春また会いましょう」とトラックに乗り込んだ。こんなエピソードを残して……（大阪を出てからはほとんど止まっている状態で、信号では30分位は動かない。尼崎の手前で寿司屋があり、巻寿司を3本巻いて貰い、車に持って帰って食べた）……

◎ 22日AM 4:30、私も家内も娘もトラックが姿を消しても、しばしの

間その方向を見守っていた。

◎ 22日PM2:00「開田村に帰りました。今朝から雪が15cm程増えています」Mさん達は29時間をかけて御岳の霊水を届けてくれた。

名を教えて欲しいという病院側に「水を受け取って欲しかった」とのみ言って名を明かさぬため、「開田村有志」と告げておいた。K病院とは金沢病院である。



外国人死者130人に
目立つ出稼ぎや留学生

外国人死者は、震災発生から約1週間、死者数は約130人に達した。そのうち、出稼ぎや留学生が目立つ。震災発生から約1週間、死者数は約130人に達した。そのうち、出稼ぎや留学生が目立つ。

ガレキ下から 相次ぎ生還
長田の3人救出

長田地区のガレキの下から、3人が相次ぎに救出された。救出された3人は、震災発生から約1週間、生死不明となっていた。

尼崎市が退去要求
ベトナム人「制限なしは困る」

尼崎市は、ベトナム人の退去を要求している。ベトナム人は「制限なしは困る」と述べている。

「命の水」で広がる輪



紀水庫から水をもらう被災者たち（神戸市中央区のポートアイランド）

自宅の井戸開放
神戸「顔、やっと洗った」

被災者たちは、自宅の井戸を開放し、水を飲むことができた。神戸市では、被災者の顔や髪を洗うための水を供給している。

飲料水即給 神戸から応援

神戸市は、被災地に飲料水を即座に供給することを約束している。神戸市は、被災地に飲料水を即座に供給することを約束している。

産場の能力 超す犠牲者

被災地の産場の能力は、犠牲者の数を超えている。被災地の産場の能力は、犠牲者の数を超えている。

近年スーパー・コンビニ等の発展により市街地では必要な物は必要な時に入手可能であり、このような店舗がある意味では家庭の冷蔵庫の代わりとなっている。

従って、家庭で非常用の食料を備蓄していた者は無かったと言っても過言ではないであろう。

発生当日・翌日は大部分の人が十分に水や食料を口にせず、それぞれが空腹を抱えて寒い夜を明かした。

食品の補給については、スーパー・コンビニ・食品関連工場等が自治体の要請により当日人手不足の中いち早く在庫商品の販売を開始したが、商品の補給がままならずすぐに品不足となった店舗もある。

また、友人知人からの持ち込みや援助もあり、地域によって格差はあったものの食料品についてはおおむね補給できていたようであ

る。

ただ、品物はあっても、水、電気、ガスが停止していたため、調理ができず何日も同じファーストフードのようなものを口にしなければならぬ状況にあった。

1月19日西宮市立中央体育館に配られた1人分の支援食 (京都新聞より)

- 朝 おにぎり1個
- 昼 シュークリーム2個
乳飲料1本
- 午後3時 ショートケーキ1個
- 午後4時 おにぎり1個
ウーロン茶1缶
- 午後8時半 ショートケーキ1個
まんじゅう1個

何度もマスコミに取り上げられた比較的恵まれた避難所でも直後はこの程度である。弁当の到着はその後のこととなる。



念願の昼 毎晩、会館裏に集まり、打ち合わせする避難者たち (神戸市中央区の春日野小)

避難所間の調整不足

目立つ食事格差

一方は雑炊、一方は冷たいおにぎり



ボランティア振り分け策探る

食料の配給を得つつ被災者ら。避難所間で格差が広がる (神戸・東灘小)

子供たちが戻る
張り詰めた心に
ひと時の笑顔

午後八時、神戸市立春日野小の避難所。避難者たちは、雑炊を食べている。中には、おにぎりを食べている人も見られる。避難所間の格差が目立つ。ボランティアの振り分け策を探る。



体験談

19日の朝救援途上の通行人よりいただいた1個のおにぎりの美味しさは忘れられない。

~~~~~

一日中避難所にいると衣食の配給が受けられるが、昼は事務所、夜は避難所生活者は配給物が貰えない。

~~~~~

1月17日は先日の法事の供物の菓子を主食とした。

~~~~~

東灘区のあるスーパーでは地震発生前に当日販売予定のパンが入荷していた。たまたま隣に住んでいる自治会会長が店長と地震直後に交渉し、店内のパン等主な食品の無料提供を受け、17日夕刻避難所へ搬入し被災者に供給した。

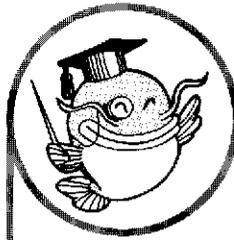
但し、量に限りがあり小さなパンは1ヶ、大きなものは $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ とささやかなものであり、品が無くなり当たらない者もあったが皆さんに大変喜ばれた。

~~~~~

1月17日深夜避難所となっている学校で泣き叫ぶ乳児の声が聞こえた。聞けば母乳はなく、ミルクの手持ちもない。空腹で泣いているとのこと。

自治会でミルクを持っていたので親子を本部となっている職員室へ誘導し少量であったが補給ができた。

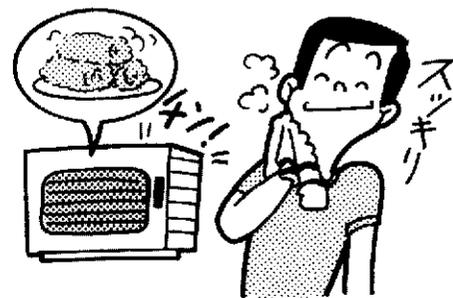
両親・祖母が涙を流して喜ばれた。



防災の心得

水と食

- ① 非常用持ち出し品として数日間しのげる食糧の準備。
 - ◎ 缶詰類・レトルト食品・カンパン・菓子類等非常食。
 - ◎ 乳幼児には、粉ミルク(哺乳瓶)・離乳食。
- ② やかんやポットには、毎日汲み置きすること。
- ③ 風呂のお湯は、消火の時や、断水時の場合のトイレの排水に使えるので、捨てずにためて置くこと。
- ④ ボトル水の備蓄。
- ⑤ 水をもらうのにポリ袋が役に立つ。
- ⑥ ポリタンクがあれば水の備蓄に便利。使用済のポリバケツでもポリ袋を使えば用途に関係なく使用できる。
- ⑦ キッチンラップ、ウェットティッシュは水がない時に重宝。
- ⑧ お風呂に入れない時、タオルを水に浸し、固く絞る……レンジでチンする……あつあつ蒸したタオルの出来上がり……体を拭くと気持ちいい。



5

被災直後の衣料品



1 被災直後の衣料品

瞬時に家屋が倒壊したケースでは、着の身着のまま逃げ出すのがやっとである。今回の地震は冬期に発生したため、まず寒さから身を守ることであり、瓦れきの中から毛布等を引っぱり出して暖をとる人もいた。

乳幼児のおむつや女性の生理用品も大変不足し、困ったことの一つである。衣類は水や食料品に比べると、差し迫って困るというものではないにせよ、入浴が十分にできない避難生活においては、肌着等の不足はストレスの原因にもなり、特に老人や病人にとっては負担が大きかったようである。

直後の衣類不足がほぼ解消された後も、被災地住民の、いわゆる“震災ルック”は当分の間続いた。足元はズック靴、男女を問わず動きやすいズボンに上はセーター、ジャンパー、手袋に防塵マスク、背にはリュックサック、頭に帽子やヘルメットというスタイルである。道路に段差やひび割れができ、至る所に倒壊した建物や塀等の破片が飛び散り、頭の上から何が落ちてくるかわからず、目的地まで歩くには、この服装が一番ふさわしかった。

6

住居の被害状況と再建



1 住宅等の被害の状況

木造瓦葺2階建てで比較的建築年数の古い家屋の多くが2階部分をそのまま残して1階部分は原形が分からないような形をつぶれた。

典型的直下型地震では亡くなった方のほぼ全員が木造住宅の1階にいて、2階部分に押しつぶされ圧死、又は窒息によるものであった。

階段の上がり下りやトイレ事情から、階下に寝ていた高齢者の死亡が多かったものと思われる、「木造」「1階」「高齢者」が犠牲者の多くに共通したパターンとなり、木造は地震に強いとされてきた従来からの定説は大きく崩れることとなった。

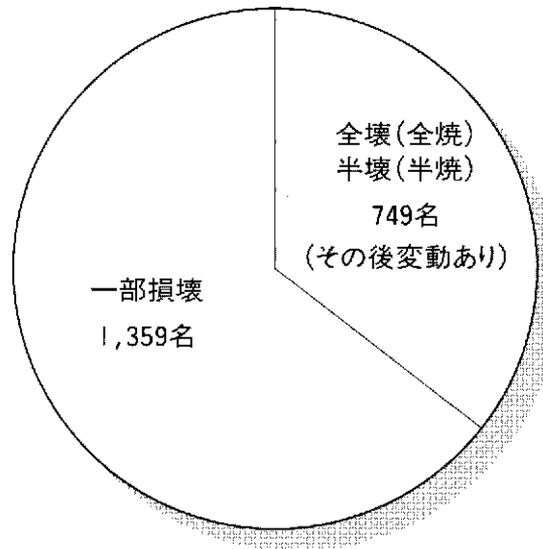
共同住宅（マンション等）の恒久的建物についても主柱の座屈、耐力壁の割れ、屋上等に設置した給水設備、電気設備等に大きな被害を受けた。

大阪湾に面した埋立地で、液状化現象による不等沈下の被害も多数有り、26階建ての高層住宅では鉄骨主柱が完全に破断し、その後の余震で倒壊の恐れも出て、いかにその振幅が大きかったかを示している。

家屋の被害の程度は、その立地、構造、方位により異なったものとなり、隣接している建物でも一方は大破し、その隣は大した被害を受けていないなどの明暗を分けた。

- 1 住宅等の被害の状況
- 2 住居の補修・取り壊し
- 3 所有か賃借か
- 4 再 建
- 5 仮設住宅
- 6 損害保険

近畿税理士会会員のうち、事務所または自宅あるいは双方に被害を受けた者は次のとおりである。

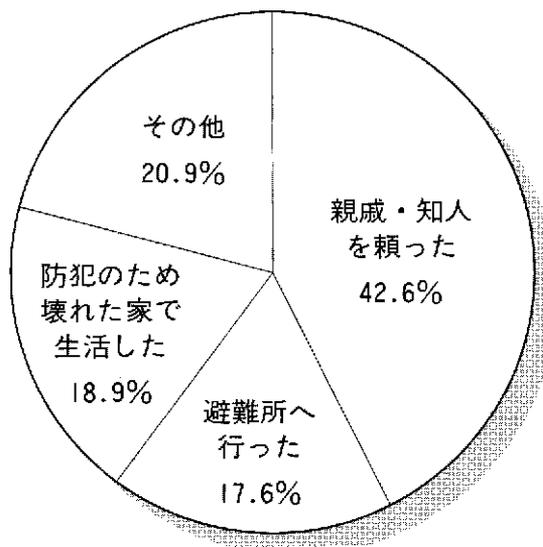


② 半壊より全壊への異動数が激しいので一括計上している。

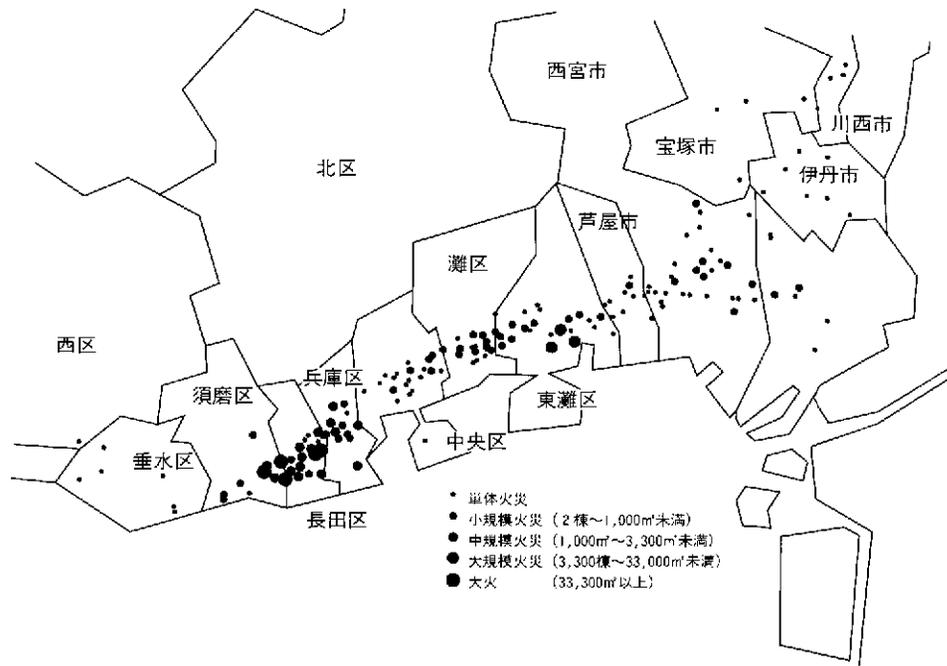
また、被災地13支部に対する今回のアンケートによる住居の被害は次のとおりとなる。

	全壊焼	半壊焼	一部損壊	被害なし	無記入	合計
件数	114件	159件	431件	169件	8件	881件
割合	12.9%	18.1%	48.9%	19.2%	0.9%	100.0%

住宅が被災した会員の対応は次表のとおりである。



神戸市周辺火災位置図



火災規模別出火件数と延焼拡大率

市 区	単体 火災	隣家延焼火災			出火 件数	隣 家 延焼率	中規模以 上火災率
		小規模	中規模	大規模			
神戸市東灘区	10	3	4	3	20	0.50	0.35
灘 区	5	6	4	3	18	0.72	0.39
中央区	16	3	3	0	22	0.27	0.14
兵庫区	1	6	4	4	15	0.93	0.53
長田区	3	2	3	14	22	0.86	0.77
須磨区	3	4	2	3	12	0.75	0.42
垂水区	5	0	0	0	5	0.00	0.00
北 区	1	0	0	0	1	0.00	0.00
西 区	1	0	0	0	1	0.00	0.00
尼崎市	5	1	1	0	7	0.29	0.14
西宮市	23	7	1	0	31	0.26	0.03
芦屋市	11	3	0	0	14	0.21	0.00
宝塚市	3	1	0	0	4	0.25	0.00
伊丹市	7	0	0	0	7	0.00	0.00
川西市	3	0	0	0	3	0.00	0.00
合 計	97	36	22	27	182	0.46	0.27

1) 大規模火災とは焼失面積3300㎡以上、中規模火災とは3300㎡未満1000㎡以上、小規模火災とは1000㎡未満の隣家拡大火災をいう。

2) 複数の出火が合流して焼失区域が連担した場合、それぞれの出火ごとに別の火災と取り扱って作表している。

(朝日新聞社 阪神・淡路大震災誌より)

2 住居の補修・取り壊し

被災家屋を補修して再使用するか、解体撤去するか判断はその家屋が自己の居住用か賃貸用かによって異なるが、取り壊し費用の全額が公費負担と決定したことで解体撤去に拍車をかけることとなった。

解体撤去は原則的には市が行うこととなっているが、自己で解体撤去し、その費用は解体業者が市に請求することもできたので、解体したガレキを積んだトラックが行列をつくることとなり処分場付近は交通渋滞が続いた。

震災直後から一斉に始まった解体工事による粉塵と騒音は言語に絶するもので町中が粉塵に包まれ防塵マスクなしでは過ごすことができない状態が数ヶ月続いた。

補修しようと思って内外装を外してみると予想以上に被害を受けていたので建て直すこととなったとか、取り壊した後に補修で十分に使用できたのではないかと等々のケースも多かった。

3 所有か賃借か

住居を所有するか、借家を賃借するかは震災前でも各種の議論があったが、震災で被災した家屋についても、補修、再建するにも全額が所有者の負担となり、入居者の負担が軽く、特に民間賃貸住宅の入居者は、補修費等で家主とのトラブルも多くて公営住宅の入居者が優遇を受けたような結果となったことから、震災以後は公営住宅の賃借を希望した被災者が多かった。

4 再 建

1968年の建築基準法の改正前に建築された家屋が被災により取壊され、これを再建しようとすると同改正法の適用を受けて、被災前の面積、構造、形状の住居が再建できないことが分かった。

更に借地の場合、被災地区に適用されている震災都市借地借家臨時処理法で、借地人は震災から最低10年の借地期間を保証されたが、地主との間で話がつかないで家屋を建てられない例も多くある。

また、マンション等では住民間の合意が難行し、再建に取りかかれないケースもある。

住居の再建や補修には当然に建築資金が必要となるが、公的な災害復興住宅融資制度や、住宅金融公庫の利子補給制度の支援策も講じられたにもかかわらず、いずれもローンの返済能力のある者を対象としているので、いわゆるダブルローンとなる者、所得及び年齢等で融資基準に達しない者については融資を受けられず、建築資金の調達ができないため住居再建のめどが立たない人が多い。

大阪市立大学の調査によると平成8年3月現在で、次表の通りとなっている。

(マンション)		
大被害	柱・梁などの構造材の損傷	
		122ヶ所 8,153戸
中被害	壁の大幅な修理が必要	
		189ヶ所 12,916戸
	このうち解体済み	100ヶ所
	解体済みのうち再建工事に着手済み	
		7ヶ所
	夏から秋にかけて着手予定	40ヶ所

5 仮設住宅

被災者が自ら建設するものと、自治体が建設する公的仮設住宅がある。

被災者自ら建設する仮設住宅は、住みなれた自分の土地に建設するもので、2階建のプレハブが多く費用は4・5百万円程度で勿論なんの融資制度もなく、すべて自己負担で調達しなければならないが、当初は品薄で国内はもとより海外からも緊急輸入された。

自治体が建てる仮設住宅は1戸当たり3百万円程度で国から9割近い補助が出る。賃料は無料で最長2年間借りることかできるが、その仕様は平屋建てのプレハブ造で、広さは26平方メートル、風呂、トイレ付きである。

仮設住宅の設置場所は公園、学校、市有地等を利用したが、各自治体とも用地確保に苦勞し、市有地の少ない芦屋市では民間テニスコートや、学校の運動場、その他のグラウン

ドまで利用し、神戸市では西区、北区、臨海部に集中したが、それでも不足なので、近隣自治体にも用地提供を依頼した。

1月27日には神戸市で優先順位を付けて仮設住宅の申し込み受付が開始されたが、第一回目の申込は9万所帯の申込があり、申込者は以前に居住していた被災地域に近いところか、自己の生活に慣れているし、通院、通勤、通学に便利という理由で特定の場所に申込みが集中したので、平均倍率は10倍以上となった。

その後、兵庫県が独居老人の複数入居を各市に依頼したが、各市は入居者のプライバシーの問題で苦慮した。

7年2月末までに1万1千戸の建築を予定していたが、完成は2千8百戸であった。

平成8年5月7日発表された兵庫県の調査によると、仮設住宅の入居者に対して行った住宅に関する調査結果は次のとおりである。

調査数	調査対象戸数	42,688戸			高齢者世帯数	13,428世帯
	有効回答戸数	37,176戸			うち一人世帯数	ほぼ半数
	有効回答率	87.1%				
収入源	年金・恩給	給与	自営業	その他	計	
	36.9%	33.6%	6.3%	23.2%	100%	
収入金額	100万円未満	100～200万円	200～300万円	その他	計	
	29.3%	23.1%	17.2%	30.4%	100%	
震災前の住居	民間借家	持ち家	公的借家等	その他	計	
	45.0%	27.4%	9.5%	18.1%	100%	

* 以前の家賃は40,000円未満が55.9%である。

転居予定	未定	その他	計		
	92.9%	7.1%	100%		
希望する新しい住まい	公的借家	民間借家	持ち家	その他	計
	68.3%	2.9%	16.3%	12.5%	100%

兵庫県下の応急仮設住宅の入居状況（平成7年10月末現在）

市町名	建設戸数 A	完成戸数 B	入居決定戸数 C	入居開始 D	鍵渡し済戸数 E	C-E	備考
						B-E	
神戸市	32,346 (3,168)	32,346 (3,168)	31,520 (2,861)	2/15	31,452 (2,793)	68 894	
尼崎市	2,218	2,218	2,193	2/14	2,193	0 25	
西宮市	5,524 (623)	5,524 (623)	5,396 (559)	2/18	5,396 (559)	0 0	
芦屋市	3,000 (100)	3,000 (100)	2,998 (98)	2/7	2,998 (98)	0 2	
伊丹市	660	660	660	2/6	660	0 0	
宝塚市	1,638 (101)	1,638 (101)	1,638 (101)	2/6	1,638 (101)	0 0	
川西市	373	373	373	2/16	373	0 0	
明石市	856	856	856	3/8	856	0 0	
三木市	12	12	12	4/18	12	0 0	
洲本市	14	14	14	3/13	14	0 0	
津名町	260	260	260	2/7	260	0 0	
淡路町	123	123	123	2/10	123	0 0	
北淡町	600	600	600	3/1	600	0 0	
一宮町	376	376	376	3/16	376	0 0	
五色町	70	70	70	2/2	70	0 0	
東浦町	222	222	222	2/17	222	0 0	
西淡町	4	4	4	3/1	4	0 0	
三原町	4	4	4	2/8	4	0 0	
合計	48,300 (3,992)	48,300 (3,992)	47,319 (3,619)	—	47,251 (3,551)	68 1,049	

※被災地外建設分は、（ ）内書きとした。建設内訳は、次のとおり。

神戸市：大阪府494、大阪市100、姫路市569、加古川市1,170、三木市82、高砂市410、
稲美町38、播磨町61、三田市143、川西市50、猪名川町44、宝塚市7

西宮市：大阪府216、大阪市170、加古川市15、高砂市1、川西市197、猪名川町4、宝塚市20

芦屋市：大阪府90、加古川市9、高砂市1

宝塚市：三田市101

〈朝日新聞社 阪神・淡路大震災誌より〉

6 損害保険

火災保険には誰れもが何らかの形で加入していたが、地震保険については阪神間の加入率は3%未満という低さで震災を予想していなかったことがうかがえる。

地震保険の保険金は建物は一千万円以内、家財は五百万円以内で、家財の損失は建物の修復割合で判定するので、家具だけが壊れた場合の保険金は支払われないこととなっていた。

そのために、地震で全壊したとしても保険金だけでは家屋の再建はできなかった。

農業協同組合等の取り扱う建物更生共済契約については、火災保険と地震保険が当初から契約に含まれているので、その最高額五千万円の範囲内で共済金が支払われるケースのように、損害保険契約との違いが話題をよんだが、加入資格は協同組合の組合員に限られていた。

その後の、新しい地震保険契約から保険金額の最高額は一千万円以内を五千万円に、五百万円を一千万円にそれぞれ増額し、家具だけの被害でも保険金が支払われることに改められた。

火災保険契約では、地震直後の火災でも地震を直接に原因とするものや、地震発生後72時間以内に発生した火災で、地震が原因と思われる火災に対しては、火災保険金の支払理由に該当しないとして、保険金は支払われない場合が、ほとんどであったが、約款に地震免責条項のある契約でも、地震を発生原因とする火災で全焼の場合に限り、火災保険金の5%（1構内五千万円を限度）を地震火災費用や、見舞金等として支払われたケースもあった。

地震発生後2～3日後に発生した火災で被害を受けた地域では、地震に直接に原因した火災ではないとして、地区単位で損害保険会社や市の共済組合を相手に火災保険金の支払いをするようにと、集団訴訟を行っているところもある。



体験談

私は、自宅1階の事務所で連休明けに提出する書類作成のため、徹夜仕事に一区切りつき時計を見ると午前5時一寸過ぎ。仮眠をとるため2階に上がりふとんに入った直後2～3秒かすかな揺れを感じ「ああ地震だな」とほんやり考えていた。

次の瞬間、東の窓からゴオーという豪音がした後何かで頭を強打され、一瞬気を失っていたらしく気がついたらたんすに押し潰されていた。

「たんすをどけてくれ」と叫んでも妻もいろいろなものの中に埋もれて身動きがとれない状態らしく何か叫んでいる有様。やっと僅かな隙間から這い出して見たところ、階段はふさがり脱出ができない。では窓から降りるべく窓際で明るくなるのを待つ。

明るくなって外を見ると何と地面がそこにあるではないか。

変な話であるが思わず吹き出して笑った次第であった。

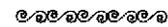
外を見ると1階事務所部分が丁度クルマ落としのように2階部分に押しつぶされていて、その時だけは大体が無神論者の私であるが、何分かの違いにゾーとするとともに、神に感謝しました。

隣近所の方々に1階部分に居た方は、すべて重傷かお亡くなりになっていました。

この度の災害で一番痛感したのは、様々な方やまた、多くの機関からの援助

やお見舞いを頂き、善意・思いやりにより人生の素晴らしさを再確認したことです。

それがすべてのような気が致します。



激震の一瞬（良運に恵まれて）

私は80歳の独身。前日まで自炊生活。たまたま腹の具合が悪く早く就寝。そのため食料は2～3日分は残っていた。

平成7年1月17日午前5時46分。あの衝撃の大地震時(M7.2)には2階のベッドでウツラウツラしていました。グラグラと家が揺れた拍子に飛び起きベッドの横に腰掛け代わりに腰かけた途端停電。部屋は真っ暗、頭の上にはたんすの上に置いていた物が降り掛かる。ドタバタと物凄い音がして身体は前後左右、丁度船の中に乗っている様でユラユラ揺れました。唯々揺れが止まるのを待ちました。

その時間の長いこと（実際は30秒ぐらい）ようやく我にかえりソロソロ移動開始。部屋には物が散乱してなかなかドアに近付けない。四苦八苦。ようやくドアまでたどりついた。さてドアが開かない。体当たりし少し開いたがどうしようもない。再びベッドに腰掛けどうすれば外へ出られるか。

カーテンを開けるとガラス戸が一枚吹き飛んでいる。そこから屋根を伝って降りることにしたが、一寸老人には地面に飛び降りるには無理だ。隣のベランダに行き「オーイ」と声をかけても、みんな脱出して無人だ。

幸いにベランダに梯子が置いてあったのでこれを借りて地上に降りた。

その時初めて生きた心地がした。朝が

白々と明けた。

外に置いていた合鍵で1階のドアを開けた。そこは事務所兼台所で被害が割合に少なかったのが、生きる命を支えてくれた。以下いろいろ考えてみると①隣家のベランダに梯子があったこと②風呂に水があったこと（トイレに使用）③食料が2～3日分あったこと（自炊しているため）④家が半壊であったこと⑤火災が起きなかったこと⑥旅行に出ていなかったこと

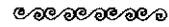
困ったことはまず水、次はガスが出ないこと（煮炊きが出来ない）（代用としてボンベ付きガスコンロを常備しておくこと）幸いに電気は2時間程で復旧したことが一番ありがたかった。

次は雨に対する防水用のビニールのシートが手に入らず困る。

震災直後に「子供を助けてください」という母親の必死の叫び声が聞こえたが、暗闇に萎縮して動けなかった。幸い子供は助かったが、あの時助けに行かなかったことがいまだに心苦しい。

震災当日は周囲の家屋数軒がペシャンコにつぶれ、生存者の救出、遺体の搬出などをした。通りがかりの救急車を止め救助を要請したが、隊員が車を離れた間にも3人もけが人が乗車している有り様だった。遺体はしばらく我が家の庭に安置した。

この規模の地震ではよほど金と手間をかけない限り、防災対策は無理だと思う。第一、建物が全壊しては手の施ししようがない。



午前5時30分頃なにか異常な気配に目を覚ました。妻も目を覚ましている様子であった。それから何分程たったか布団が上にドーンと上がったかと思うと、グラ、グラと横に揺れました。布団の上に座ったまましばらく茫然としていました。居間には和だんすが一本あったが少し傾いている様であった。

7時頃であったか道路を隔てた前のIさんから、ベランダ側より「以前に住んでいた家を見に行ったところ隣のAさん（妻の妹）宅は全壊で、お宅へ来るよう言っていました」とのことづけがあった。玄関を開けるため玄関までの様子を見ると、水屋・冷蔵庫等すべてのものが倒れ、ガラス・瀬戸物等が粉々に壊れ、足の踏み場もない有り様でした。

午前8時過ぎAさん一家5人が来宅した。Aさんと妹は1階で寝ていたところ2階が落下したため2階に居た長男と次男によって救出してもらったとのことです。早々台所と足の踏み場もない二つの部屋の片付けをしてもらった。午後1時頃まで50%程度の片付けが終わり、和だんすを片付けた後を見てコンクリートの鴨居（12cm）に深さ1cm程度の掘れた傷が2ヶ所出来ており、もし鴨居が無ければ和だんすの下敷きとなり命が無かったと思うと恐怖で一杯であった。

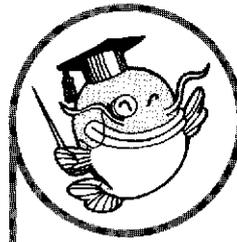
居間が2部屋片付いたので、一部屋は私達が、一部屋は妹一家が使い2月末まで共同生活をした。



町内の430世帯のうち約80%が全・半壊

した神戸市灘区大石町の町内会では、震災より1ヶ月经過した頃「いつまでも学校に甘えてはいかん」と長年積み立てていた町内会費で170㎡のプレハブ仮設住宅を建てた。

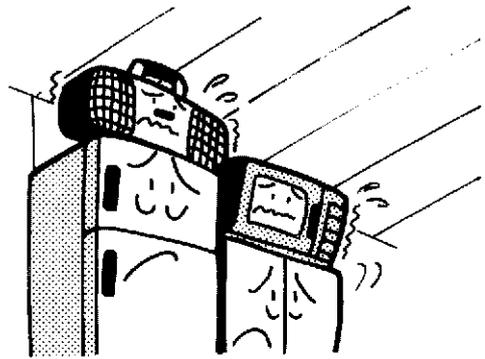
自炊もでき、トイレもあり、同じ敷地にはボランティアが開いている風呂もある。



防災の心得

住

- ① 本棚・たんす等は、寝室に置かない。
- ② 高い所にテレビ等の重いものを置かない。



- ③ たんす・食器棚等2段式の家具は上部が必ず転倒するので器具で固定する。
- ④ ピアノなどキャスターがある物が動くことによって、転倒せず助かったケースがある。
- ⑤ 木造建築物は、土台・柱・梁の腐食に注意する。
瓦葺き屋根は倒壊の可能性が高いのでできれば軽い屋根にかえる。
- ⑥ 通常の出入り口から避難できない場合を考慮し、ベランダ等には、避難ばしご等の常備と、重い物を置かないようにする。

1995年(平成7年)2月13日 月曜日 神戸 三 新聞 阪神(夕刊)

阪神大震災・火災保険請求

「被災者のため 迅速な処理を」

神戸市消防局、損保協に要請

火元特定へ調査急ぐ

阪神大震災発生後、被災者の生活再建に資するため、神戸市消防局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。

同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。

同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。



丘陵地でも夜火化

寝床の地盤が10センチ程度陥没

寝床の地盤が10センチ程度陥没し、被災者の生活に大きな影響を与えている。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。

同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。同局は、火災保険請求者の被害状況を調査し、火元を特定し、迅速な処理を要請している。